



自分が、武器を手にして
戦争に参加することを想像できますか
無惨な殺戮は、子ども達の目に
どう映るか、想像できますか

国家は、経済的利権を追い
軍隊で安全を確保しようとするのか

ひとり一人が生きる営みを掌中に戻し
未来の社会を語り始めよう

イラクの子ども達を救いたい
病院へ薬品を送る熱いアクションが
隣国ヨルダンとクウェートで展開されている
未来へ向かって共に命を育んでいくために

風下の村を訪ね、 スミスルイ・ジーズニ 現代の「生の意味」を思う

米田 綱路

貝原浩『風しもの村から』



ベラルーシへの旅は、東京・東中野にある「ばつてん房」の扉を開けたときから始まっていた。先月（二〇月）末日をもって一六年半の歴史に幕を閉じ、人びとの心なかに引越した一室——先ごろ世を去った、「画伯」と貝原浩さんのアトリエがあった場所である。

この夏と秋は、「ばつてん房」とともにあった。そこで三ヶ月ほど、貝原さんの遺品整理を続けているパートナーの世良田律子さんを手伝った。わずかな時間だったが、ほんとうに多くのことをこの場所を感じた。それまで知らなかった「画伯」の作品や仕事と出会い、未知の本を手にし、世良田さんの話に引き込まれた。次々にいろんな人が訪ねてきては、貝原さんと過ごした時間を語っていた。

遅ればせというにはあまりに遅ればせであったが、少しずつ整理がすすんで日々がらんどろになっていく室内で、私はまるで時代を追いかけるように、もうこの世にいない貝原さんとその仲間を知ることになった。

耳下腺ガンが見つかったちょうど二年前の二〇〇三年一月、この場所で貝原さんは、「もうすぐチェルノブイリ原発事故から二〇年。ベラルーシのことを絵本に

しよう」と話したのだった。事故とその後について、私は多くのことを知らなかった。ただ、二〇世紀ロシアの思想と人間にわずかながら関心を寄せてきた者として、そこには現代を考える上でとても大切なことがある、という予感めいたものが閃いた。

「ばつてん房」を後に東中野の商店街を歩きながら、ふと、ふたつの「チエ（Che）」というイメージが湧き上がってきた。そのときたまたま私は、ロシアのジャーナリストで「ノーヴァヤ・ガゼータ」の評論員、アンナ・ポリトコフスカヤのルポルタージュ『第二次チエチエン戦争』（後に『チエチエンやめられない戦争』（NHK出版、二〇〇四年）として邦訳刊行）を読んでいて、何か夢中で、貝原さんにチエチエン戦争の話をしたのだった。ロシア内務省部隊が使った正体不明の毒ガスによって、人質となった罪なき多くのモスクワ市民はもとより、チエチエンからのロシア軍撤退と即時停戦を要求した独立派の部隊全員が殺害されたノルドオスト劇場占拠事件から一年、そして第一次チエチエン戦争勃発から九年がたとうとしていた。

チェルノブイリ原発事故、そしてチエチエン戦争——このふたつの「チエ」が引き起こしてしまった途方



貝原浩『風しもの村から』

になったか。貝原浩・画文『風しもの村から』（平原社、一九九二年）に収められた原画や旅のスケッチ・ノートを見ながら、世良田さんからその話を聞いた。彼は病床にあっても、最後までベラルーシに行きたがっていたという。「貝原さんにとって、ベラルーシに行ったことはほんとうに大きかったのよ」。世良田さんはそう語っていた。

それは「ジーズニ（生）」の大きさだった。私のベラルーシ行は、その意味でも、貝原さんの導きによる「生

「俺はずっとソ連に仕えてきたんだよ。チェルノブイリ原発事故が起きた三日後、爆発で破壊された四号炉での放射能汚染物質撤去（掃除）作業に送り込まれた。そこで半年働いたんだ。エリツインが大統領選に立候補したとき、俺はやつに投票した。チェチェン人のほとんどがやつに投票したんだよ。（ソ連が崩壊し、チェチェンが独立を宣言した）一九九一年、俺たちはやつのことを偉大な民主主義者だと思ってた。それがいまや、あいつは俺たちを欺いた。やつのは嘘っぱちは際限ない」。

放射能汚染物質の「チーストカ（掃除）」——その言葉はスターリン時代の「肅清（チーストカ）」を髣髴ほうふつさ

せるように響く。そして、プーチン政権下で始められた第二次チェチェン戦争は、とりわけ二〇〇一年九月一日の米国への自爆攻撃以降、国際的な「反テロ」のかけ声に合わせて、「ザチーストカ」といわれる、掃討作戦を展開してチェチェン住民を拉致・殺戮きつりくし、さらに「ディアスポラ（離散）」を強い、多くの難民を生み続けている。ポスト・チェルノブイリ時代、放射能汚染地帯での「掃討作戦」も、戦争を思わせるような強制移住と村の破壊の日々でみだされ、住民のディアスポラを加速させたのだった。

その意味でもふたつの「チェ」は、一九世紀以降のロシア思想で一貫して問われてきた「生の意味（スムイスルイ・ジーズニ）」を、繰り返し現代に問いかける。それを前に、焦りだけが未読の本のように積み重なっていく。だがその傍らを通り過ぎて、貝原さんは逝ってしまったのである。ロシア・インテリゲンツィアを押し苦しめ続けた、ドストエフスキイのいう「プロクリヤートウイ・パブロス（始末に負えない難題）」が、心のなかに残された。

ベラルーシで出会った人たちや風景に、貝原さんがどれほど魅せられ、たびたびその地を訪ねるよう

の意味」への問いがもたらしたものだ。彼の仕事と出会わなければ、ベラルーシに行くことはなかったかもしれない。遺品整理のなかで、貝原さんの描いた放射能汚染地帯の村々の風景、村人たちの表情、そしてソージ川のゆるやかな流れが、とても身近なものになってきた。そしてスケッチ・ノートに書かれた文章の行間から、「風しもの村」のいまを思い描くことができた。

ベラルーシ出発前日の九月二九日夜、「ばってん房」に本橋成一さんが来られた。貝原さんの装幀した本が山積みになった整理中のアトリエで、世良田さんがピース缶に入れた遺骨を、本橋さんに託した。貝原さんの愛したソージ川に散骨し、ドキュメンタリー『アレクセイと泉』の舞台ブジシチェ村に埋める遺骨が、そのなかに入っていた。二人のやりとりを傍らで見ながら、私は心のなかで「貝原さん、一緒について行きますよ」と呟いた。

ゆるやかに流れるソージ川のほとり、作家の田口ランディさんが祈りをささげ、貝原さんのたましいが「風しもの村」の大地に抱かれるよう、皆で祈った。この地の未来を自分のそれと重ねてきた、それぞれのジーズニ

も両脇に抱えて、貝原さんがここに還ってゆくように感じられた。放射能汚染によって「埋葬」され、人気のなくなった廃墟の村に、それはジーズ二を呼び還す祈りのようにも思えてきた。

「地図の上でいくら汚染地として囲んだところで、風は舞うし、流れる川は止まってはくれない。土ぼこりはいえ、もうはるか遠くにまい上がってしまう。……汚染され、立ち退かされた『廃墟の村』だけでなく周囲の村々にも、徐々に汚染は拡がってゆくことはさげられない」。

貝原さんは『風しもの村から』に、そう書いていた。彼の言葉を反芻しながら、私はベラルーシの風景のなかにあった。ここに来る前、ロバート・ポリドーリの写真集『立入禁止ゾーン——プリピャチとチェルノブイリ』（二〇〇三年）で目に焼きついた、原発から半径三〇キロ内に現出した人工的な廃墟とは異なる何かが、まるで汚染の拡がりに逆らうように、ここには拡がっているように思えた。人工的に線引きされた立入禁止ゾーンの境界をもとせず、放射能はたゆとっている。世代を超えて、それは人間を蝕み続ける。だが、流れる川は止まってはくれない、それと同様に人間のジーズ二も止めるわけにはいかない。

「強制移住させられ、廃墟となった『埋葬の村』に入ると、二度と住むことのない家のいまだ色あせぬ窓に、封印の板が村人の無念さそのままに、乱暴に打ちつけられています」。

ドウチチ村で、貝原さんの描いたその光景を目にした。家々は木々に包まれ、朽ちて倒れようとしていた。強く印象付けられたのは、人気なき廃墟の数々と、そこにポツと明るさを帯びたように建つクリュチンスキイ夫妻の家だった。人間が生きているということが、どれほどその場所に暮らしの生気を吹き込むかを、そこで感じた。寂しさのないまぜになって、強制移住で村を去った人びとの無念が、ジーズ二のコントラストをいつそう際立たせていた。

— ブジシチェ村に湧く泉の近くに貝原さんの遺骨を埋め、小さな自然の墓石を立てた。あとでアレクセイ・マクシメンコが「そこに囲いを作らなくていいのか」と訊ねてきた。「彼はこの村に抱かれて、あなたたちと一緒にいることを望んでいると思う。だから囲いはいいのではありません」。そう答えると、アレクセイは頷いて「大事にします」と言った。ブジシチェ村のその場所に、ジーズ二の意味が灯った気がした。

貝原さんを送ったソージ川には、私たちの影が長く伸びて浮かんだ（写真提供 村石保）



放射能汚染地帯のなかに変わらぬ灯るジーズ二——その風景が脳裏に焼きついた。かつて詩人のマリーナ・ツヴェターエヴァは、バステルナークの詩集『我が妹人生（セストラ・マヤ・ジーズ二）』に触れて、自分にはわかる、「私の専門はジーズ二だから」と書いた。その作品を前に、そしてベラルーシの風のなかで、貝原さんもまた「俺の専門はジーズ二だから」と語って去っていくように思えた。

放射能汚染は、こうして現代のジーズ二を苛烈に際立たせ、「風しもの村」の風景にとけこんでいくようだった。私のなかで、「生の意味」を思い出す場所が、また一つ増えた。

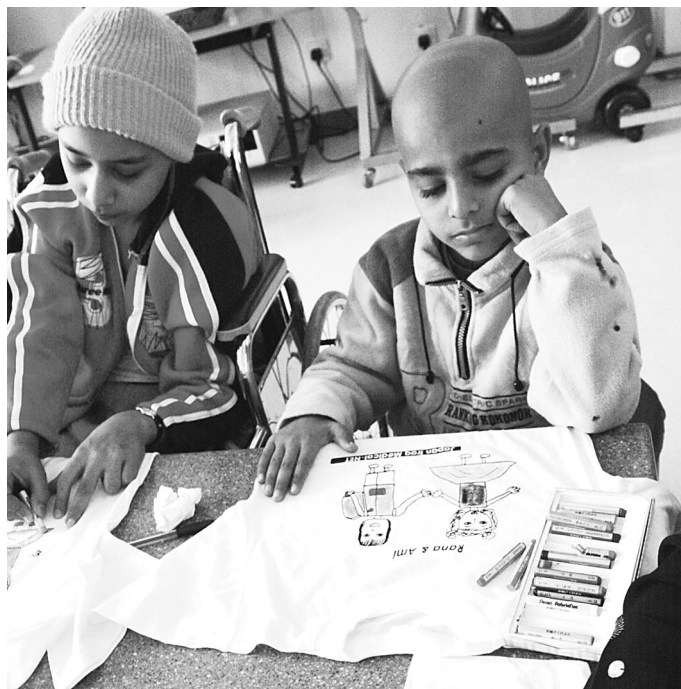
米田綱路（よねだ・こうじ）

1969年奈良県生まれ。新聞記者を経て、2003年まで「図書新聞」編集長。現在、同紙スタッフ・ライター／編集者。編者に『抵抗者たち』、『語りの記憶・書物の精神史』。



特集

緊迫のヨルダン情勢のなかで 医療支援を継続



11月10日未明（日本時間）、ヨルダンの首都アンマンで57名死亡のテロが起きた。その時、2名のJIMNETメンバーは大切な薬品を手にアンマンに向かっていた。

緊急の時に、冷静に状況を確認しながら、薬を届けた佐藤さん、西村さんの活動にNGOの姿が見えてくる。



66号 冬

CONTENTS

特別寄稿 風下の村を訪ね、現代の「生の意味」を思う ＜米田綱路＞	4
特集 緊迫のヨルダン情勢のなかで医療支援を継続 冬のかき氷作戦＜佐藤真紀・西村陽子＞ イラク医師・看護師研修と医薬品の 輸送に取り組む！＜西村陽子＞ アンマン便り ＜井下俊＞	12 20 23
連載随筆「呼びかわすこと」＜宮尾彰＞	26
第82次訪問団報告 ミンスク遠隔医療国際会議＜滝沢正臣＞	28
ジーマのロシア小話	32
ベラルーシの食卓	34
モスクワ便り	35
戦後60年を問う会・まつもと	36
振替用紙のメッセージから	40
ありがとうございました	42
JCF募金のお願い	45
出会い Встреча	46
ニュースクリップ	52
Здравствуй те！ （事務局広場）	54
本の紹介 Book review	56
チェルノブイリ事故から20年、JCF設立15周年記念イベント ボランティアスタッフ募集のお知らせ	58
事務局日誌	59



冬のかき氷作戦

佐藤 真紀

(JIM-NET事務局長)

西村 陽子

(JIM-NET)

(アラブの子どもとなかよくする会)

JIM-NETホームページより
<http://www.jim-net.net/>

りのことをやろうというのがこの作戦です。

「冬のかき氷作戦」第一弾として、夜約百万円相当の菓を送りだしました。

作戦開始

アンマンでアイスボックスに詰められた抗がん剤を氷がすべてとけてしまう前にバグダッドの病院に運び込む…。

制限時間は48時間。

砂漠の国にも冬が近づいて、朝夕、冷え込むようになり、氷はとけにくくなつたが、アンマンのホテル爆破事件以来、ヨルダン―イラク国境通過が困難になつた…。

どれだけ時間がかかるかわからないうえに、季節がら、道中にもう氷売りはない。しかし、バグダッドの病院からは2、3日中に要冷蔵の抗がん剤が切れるので荷が着くのを待っているというメールが来ている。難易度も重要性も超高度な作戦である。

11月9日にヨルダンの首都アンマンでテロが起きてから、ヨルダン―イラク国境の管理が厳しくなり、とうとう国境は閉鎖されてしまいました。イラク国内でもテロは毎日のように続いています。

総選挙を12月15日に控えたイラクでは、その前後にさらに治安が悪化し、行政が混乱することも予想され、白血病患者やがん闘っている子どもたちの菓が底をつくことが心配されています。

そこでJIM-NETでは、必要な菓を少し多めにイラクの病院へ送ろうということになり、バグダッドとモ

スルの合計3病院へ問い合わせたところ、「今でも菓が足りない！早く欲しい！」と合計600万円相当のリクエストが来ました。11月18日は、朝から緊張していました。

ヨルダンでも金曜礼拝の後は、数万人規模のデモがありました。イラクでは、バグダッドの内務省ビル付近と外国人がよく利用するホテルで自爆攻撃が発生、北部のイラン国境に近い町ハナキンでは2つのシーア派モスクを狙った自爆攻撃により、70名以上が死亡しました。そんな状況下で出来る限

アイスボックスに菓とアイスパックを入れ厳重に目張りをして、輸送会社のアップ・マージンが受け取りに来るのを待つ。アラブ系のTVチャンネルはどこも、今日もイラクで爆発によつて多くの犠牲者が出たことを報じている。今朝、アンマンにたどり着いたイラク人の話では、バグダッド街道の治安状況はそれほど心配ないというが、いつ何が起ころかわからない。

荷物を渡して10分もたたないうちに、「バグダッドに向かうはずだった車のドライバーが警察に連行されてしまった」という連絡が入った。ヨルダンを離れる

前にいきなり作戦失敗…か？

さらに10分後、バグダッド行きの別のドライバーが見つかったので、菓を積みかえてイラクに送るといふ朗報が入った。ありがとう、アップ・マージン。

名前を聞いたら鳥肌が立ちそうなこの作戦、実は現地の人たちの水もとかすような熱意に支えられているのです。

もう、私たちは、無事に着くまで、お祈りでもするしかありません。

ヤー・アツラ!!

第1弾成功

11月20日、「冬のかき氷」作戦第一弾の積荷が、無事にバグダッドの病院に届いたとの知らせがありました。24時間以内に要冷蔵の菓が届いたということので安心していきます。

ドクターの話では、保冷材も凍つたままで問題がなかったとのこと。12月15日の選挙の混乱を考えると12月10日がタイムリミットだと思つています。ここ2週

間が勝負だと思つています。

緊張の続くアンマン事務所

ちよつとしたことで人間関係がギクシャクすることもあります。

西村陽子は、菓が無事に到着するまで、ゲンをかついで、大好きなコーヒーを飲まないという。イブラヒムもゲンをかついでイラクティーをやめるといふ。

しかしイブラヒムは、かわりに「のどが渴いた。ジャパニーズ・コーヒーを入れてくれ」としつこい。西村陽子がコーヒー断ちをしているのにお構いなしなのである。

「忙しいから後にしてくれ」

と軽くあしらつたら、

「イブラヒム、今飲みたい！」

「イブラヒム君、邪魔しないでくれたまえ」

イブラヒムはディスタープの意味がわからず、辞書を調べた。

「ディスタープ＝邪魔！ おお！イブラ



ヒム、世間の邪魔者!？」

と言って落ち込んでしまった。

次の日、バグダッドから無事に薬がついたという連絡が入る。国境も問題なく24時間以内にバグダッドに届いたことになる。

病院の医師の話では、中の温度も冷たかったという。作戦が成功したという知らせにJIM-NETのアンマン事務所は、喜びにみちあふれ、再びコーヒーの香りがぶんぶん漂い、ふてくされていたイブラヒムもイラク・ティーを入れてすっかり機嫌がなおったようだ。



薬の梱包をする西村さん

ラクの子どもを救うために奔走するドクターたちの元に届く。薬が無事届いたこともうれしいが、みんなが無事で元気になることがそれにも増してうれしい。

薬を調達してくれる薬剤師のDr.ハイサムは「私たちは神に認めていただけるようなことをやっているんだよ。だから、守ってくださいっているんだよ。」と言う。

イラクのすぐ隣、アラブが人々の身近にこのアンマンで、人間の力の小ささを思い知らされながらも、力を合わせたら、けっこういろいろできるじゃないか、という思いを確かにしています。今まで何のトラブルにもあわず、やってこれたことを感謝しつつ、作戦には失敗はゆるされません、情報収集、状況判断に細心の注意を払って、作戦は今晚、第3段階（バスラの病院へ）へと進みます。

イラクから、看護師3名、検査技師2名が無事アンマン入りし、4週間の

外に出ると紅葉が…。

冬の始まりです。

アンマンからバグダッドへ…。かき氷はとける前に無事届きました。

薬を送り出して36時間後（送り出したのは11月18日夜）、バグダッドのドクターから「荷物はすべて冷蔵状態の良いコンディションのまま受け取りました」というメールが来た。ほっと胸をなでおろす。国境も混雑しているものの、混乱はないということだ。

イラクでの選挙が近づいて、国境が封鎖されてしまったり、状況がさらに不安定になったりする前に、ここ1〜2か月に必要な薬を送り込もうと、作戦は第2段階へ…。

寒さが少しずつ進行していて、薬を積んだ車を見送る私たちの吐く息は真っ白。22日の夜、送り出した第2便の薬は24日の午前中に無事に病院へ届いた。

「バグダッドで、バクバで、ラマディで、爆発が起こり、何人犠牲になった

研修がキング・フセイン・がんセンターで始まりました。みな、はりきっています。

第3便バスラへ

バグダッドと異なり、バスラの最高気温は25℃を超えることもあります。そして、陸路でバスラまで行くのは簡単ではありません。アンマンを夜中に出発して、国境で仮眠。夜明けとともに国境を越えます。昼ごろにバグダッドに着き、その日はバグダッドに1泊して、翌朝早く出発し、バスラには昼過ぎに着きます。ということは、3日かかってしまいます。どこかで水を補給しなければなりません。

それならいっそ、要冷蔵の薬はクウエートから、運びこもうというというのが、冬のかき氷作戦第3弾です。

佐藤がクウエートに飛ぶことになりました。

クウエートからバスラまでは、半日



薬の荷造りをするハイサムさんと現地の助っ人お姉さん

「TVをつければそんなニュースばかりだ。そんな状況下で、私たちの送った薬は、爆発にも略奪にも遭わず病院に届いている。安全運転でバグダッドに運んでくれたドライバー、それを受け取って病院に届けてくれたイラク人ボランティアの協力があつて、薬はイ

もあれば荷物を届けられます。ただし飛行機でアンマンからクウエートまで運べる荷物には限りがあるので、冷蔵が必要でない荷物に関してはアンマンから陸路で出荷することになりました。

ちようど、クウエートの任務を無事に終えた佐藤が、アンマンに戻ってきたのが11月27日。西村陽子がバスラ用の荷造りを行っているところでした。今回は、要冷蔵の必要がないので、気分的にはずいぶん楽です。ちようどそのときTVでは、イギリス人とカナダ人の援助団体のスタッフが拘束されたとの情報が入ってきました。団体など詳しいことはわかりませんが、安否が心配です。すでに、選挙を前にかなり治安が悪くなってきました。

無事に薬が着くように祈るしかありません。

いざクウエートへ

11月22日、薬を運ぶ仕事をお願いし

ていたイラク人のビザが取れたので、急遽クウェート行きの飛行機を手配。いつもより早めにアンマンのクイー・アリア空港に要冷蔵の薬を持って出発です。日本人がイラクに行くのは大変なので、ちようど家族に会うために帰郷するイラク人をお願いすることにしました。しかし問題はビザ。イラク人にはなかなかビザが下りないと聞いていたので心配しましたが、クウェート政府と連合軍とで構成される人道支援センターに申請したところ、ビザを出してくれたのでした。

ところで、クウェートに着くと汗がにじむほど暑いのです。ともかく冷蔵庫がきちんと備えてあるホテルに泊まるうということ、最初は2人で185ドルのホテルに泊まりました。

クウェートには安いホテルが無いと聞いていたので、飛行場についてもたまたましているうちにクーラーボックスの温度が上がってしまうと大変なの

で、知り合いに手配してもらっておきました。

とはいえ、「それにしても、このホテル高すぎる！」ということ、街なかの安ホテルを探しました。そしてなんと2人で37ドルのホテルを発見。ドミトリ（学生寮）のようなホテル。しかし冷蔵庫がありません。親切なクウェート人の話では、中古の冷蔵庫を買ったほうが安いということで早速冷蔵庫を探しましたが、あいにく時間が遅く中古の冷蔵庫が手に入りません。

高価な薬が盗まれても困るので、少し劣りますが2人で70ドルのホテルに移ることにしました。ここは冷蔵庫がついています！

■ 温度をチエック

早速天気予報で温度を調べます。これを見ると、ちようど25日ころは少し温度が下がり、それを過ぎれば少し高くなってきました。そこで、国境を越え

る日を25日、金曜日としました。でも、イラク人だけで国境を越えて大丈夫かと心配です。湾岸戦争以来、イラク人とクウェート人の関係は冷めきつてい

ます。何かと因縁をつけて薬が没収されたり、あるいは取り調べに時間がかかったりしないか、考え出したら心配だらけ…。人道支援センターに相談に行くところ、ちようどイラク軍のキャプテンが来ていて明日、軍事用の国境を越えるので一緒に連れて行ってあげると言われました。しかし、軍だとかえって狙われることもあるので、やはり一般の国境を越えることにしました。

■ 温度管理は？

24日、木曜日。やはり、クウェートは温度が高いのでかき氷が解けてしまわないか心配です。ちようどそのとき通りには、氷菓子売りが通りかかりました。アイスクリームなどを自転車で売りに来ています。近代的なクウェートですが、意外に素朴な面もあわせ

持っています。

さっそくこの自転車を買って取って、これで国境まで走っていきましょうということになりました。でも、値段を聞くと740ドルです。ちよっとこれは高いのでやめ…。(アイスクリーム売りと交渉)代わりに、コーラやジュースなどを凍らせてアイスボックスの冷蔵を強化することにしました。ところが、冷蔵庫でコーラを凍らせてみると、缶がはじけてしまいました。これではまるで爆弾みたいですよ。

■ アラビア語が通じない！

クウェートは人口の45%がクウェート人で、あとは外国人。最近はいンド人、バングラデシュ人がタクシーやお店を任されているので、アラブにいるという感じがしません。同行したイラク人も、なんだか物怖じしています。

■ 作戦決行の朝

さあ、いよいよ、国境を越える日がやってきました。

朝8時にクルマが迎えに来てくれました。運転手は実はイラク人。クウェートで生まれて、クウェートの農業省で働いていましたが、1990年イラクがクウェートを占領。その後、アメリカがクウェートを開放すると、家族はみんなイラクへと移り住みました。彼もイラクへ行こうとしたところ、国境は閉鎖され、家族が生き別れになってしまったのです。

今と違い携帯電話もない時代です。1997年と2001年、両親に会うために、彼はヨルダンまで出てこなければなりません。

2003年、サダム政権が崩壊すると、自由にクウェートとイラクの間を行き来することができるようになりました。そんな身の上話を聞きながら、クルマは、死のハイウエーと呼ばれて

いる道を北上します。ここではかつて敗走するイラク軍をアメリカ軍が猛追し、多くの劣化ウラン弾が使用されたところなのです…。

9時30分：

クルマは国境に着きました。ここで、国境を越える人は別のバスに乗り換えます。イラク人を見送って私たちは、近くの農場に潜伏し、もし問題があった場合はただちに駆けつけて薬を引き取るという計画です。そのためにドライバーはイラク側にもいけるライセンスを持っています。

10時30分：無事にクウェート側国境を通過したとの連絡。薬の中身も大丈夫です。

11時10分：イラク側国境で待たされているという連絡。

11時30分：無事にイラクに入国したという連絡が入りました。

これで一安心です。

私たちは農場の近くのモスクへお

祈りに行くことにしました。農場といってもクウェート人は住んでいません。バングラデシユ人やインド人が農場の管理をやっています。週末のみクウェート人がやって来て、農を楽しんでいるとのこと。

一歩先のイラクでは、貧しい農家の人たちがトマトなどを作って暮らしています。トラックの荷台にわんさかと乗ってやってくる、インド人や、バングラ人、一体ここはどこ？ という感じがします。

冬のかき氷作戦支援品

- ・アスバラギナーゼ（抗がん剤）
 - ・ピンブラステイン（抗がん剤）
 - 等薬品総額約620万円
 - ・G|CSF
- （麒麟麦酒より寄付）
約1900万円相当

う手痛い損害を出しながらも、冬のかき氷作戦は無事、完了いたしました。合計すると2500万円を超える薬をイラクの子どもたちのもとへ届けたことになりました。日本で、協力してくださいました皆さんに感謝します。作戦終了と同時に、小春日和どころか、セーターなんて着て歩けないくらいあったかくなってしまう今日この頃、お天気までもが協力してくれたようです

次はイラクでの選挙終了後、状況を

見ながら新たな作戦へ進む予定です。

■アンマン高級ホテルへ決死の覚悟で
モスル用の薬はバグダッドの病院に運びこんであります。

モスルの患者が、バグダッドに検診などで来る際に帰って帰ってもらおうという段取りになっていました。ところが、サダム・フセインの裁判が始まり、

すべてのオペレーション完了!!

■薬はすべて無事到着

12月1日、メールを開けると「すべての薬を受け取りました」

「12月分はもうこれ以上のリクエストはありません」というメッセージがバグダッドのドクターから届いていた。選挙前後の混乱を見越して十分な量の薬を送り込んだことが功を奏した。感動した。「まだ足りない」と言われることはあっても、「この先1か月は大丈夫」なんて言われたことはなかったからだ。

そして、数時間後、バスラの病院にも無事薬が到着したことを確認できた。すべてのオペレーションは100%成功した。かに、見えた。重大任務を果たしてアンマンへの帰途をたどっていた4つのアイスボックスのうち1つが、国境で税関に「拉致」された。ドライバーが税関通過のために

やむなく1つ差し出したのだそうだ。（まるで時代劇に出てくる悪代官に差し出された娘さんのようだ。）

即刻、運送会社のアブ・マージンから電話が来た。「税関でもめごとをおこさないために仕方なかった。ドライバーを許してやってほしい。」

「気にしないでください。薬は無事届いて、空っぽだったんだからいいです。」

「じゃあ、2つ返すからね。」

「え？ 4—1—1—3では：??」

「日本製の新品のアイスボックスとオレの古いアイスボックスを交換してくれる約束だっただろ。」

「あっ！そうでしたね。水色のきれいなのですね。プレゼントします。」

「プレゼントじゃないよ！交換するっていう話なんだから、It's mine!（それはオレのもんだ！）」

「ハイー！おっしゃるとおりです。」

こうして、アイスボックス2個とい

テイクリートでは、サダム支持のデモ。患者さんが怖がってバグダッドまでなかなか上がってきません。

モスルの病院で緊急に必要な薬がある！作戦は重大な局面を迎えました。

ところが、この危機を救ってくれる人物がアンマンにいる！モスルの病院の同僚の医師が別の研修のため、アンマンに滞在中、しかも、明日の朝、飛行機でアルビル経由でモスルに帰るということが判明したのです。ただし、医師が泊まっているのはアメリカ資本の高級ホテル。インドネシアでは、同じ名前のホテルが自爆テロにあっているのです。一瞬凍りつきます。

「大丈夫、私たちはすでにずぶぬれ、どうして雨を恐れることがありませんよ」

モスルの女医さんは言います。つまり、イラクでは毎日のようにどこかで爆発が起こっているのです。

薬をアンマン市内の高級ホテルに届ける女医さんをエスコートするとい

う重大任務をかってきたのは、薬剤師のハンサム（男前なのでハンサムというあだ名で呼ばれている）。高級ホテルと言えば今、ヨルダンでもっとも警戒が必要とされている場所だから大丈夫。「私はアッラーの決定に従う。アッラーが望むなら、いつでも死を受け入れる。その覚悟はできています」毅然とした態度で、彼はホテルに向かっていきました。

ハンサムから任務完了の電話が入る。彼は無事に薬局へ戻ってきました。そして、彼は言います。彼にとつて、薬局は「平和なジエイル（牢獄）」なのだそう。年中無休で、夜遅くまで店をあげ、いろんな国籍のお客さんが次々とやってくる。彼はとつても、世話好きで礼儀正しい。

「今度、イラクに行くときは連れてきて。きつとお役に立てると思う。」日本からのお客には特別アフターサービスつきなのです。

緊迫のヨルダン情勢の中で イラク医師・看護師研修と医薬品の輸送に取り組む！

西村 陽子

(JIMINET)

アラブの子どもとなかよくする会

11月11日アンマンに到着して10日
が過ぎた。

昼下がりにダウンタウンの野菜ス
ーク(市場)に立ち寄ってみると、かき
くり、りんご、みかん、ざくろ、ナツ
メヤシ…色とりどりの秋の果物が山と
積み上げられている。暑い時期にはあ
まり見られない葉もの野菜もしゃきつ
としたまま、路地に並んでいる。日本
のスーパーの野菜売り場より新鮮で、
種類、量ともに豊富。なんといいても
安いので、ついつい、ビニール袋の底
が抜けそうなほど買ってしまふ。スー



アンマンの野菜市場には果物の山

クを歩いていると「ニイハオ」と声がかか
かる。日本から来たと言うと「ジャ
パニーズカー、グッド！」イラクで何
度も聞いた言葉だ。今、ヨルダンには
50万人近いイラク人が避難している。
路上に座って道行く人にタバコや小物
を売っている女性や、野菜市場で荷物
運びをしながら、「サードウーニー」(助
けてください)」と手を差し出して
くる若者はイラク人だ。一方で、金持ち
のイラク人がヨルダンに移り住んでき
たため、この2年で不動産は3、4倍
に値上がりしたという。

スークの人ごみをかき分けてやつ
てきた数人の若者が、「アル・オールド
ン、アウワラン！(ヨルダン、ファ
ースト！)」とヨルダンの国旗をかけた
てみせた。これは、アブドラ国王が王
位について間もないころの演説の言葉
だそう。ヨルダンには、パレスチナ
をはじめ、ロシアなどいろいろな地域
出身の人々が住んでいるが、皆が「ヨ

ルダン国民」として団結しようという
意味なのだという。11月9日に起こ
ったアンマンのホテル爆破事件は、罪の
ない一般市民、結婚式に集っていた若
者や赤ん坊までが犠牲になった。「ヨ
ルダンの9・11」にヨルダン国民皆が
憤りを感じ、テロに対する非難の声を
あげた。顔にヨルダン国旗をペイント
して赤いハッタ(男性が頭にかぶるス
カーフで、ヨルダンは赤の格子模様)
を身にまとった老若男女がテロ反対と
ヨルダン国民の団結を訴える集会や行
進に参加する様子などが連日のように
新聞やテレビで報道された。町のいた
るところに大小さまざまな国旗が掲げ
られ、若い女性までが赤いハッタを首
に巻いている、私は今までヨルダンで
そんな光景を見たことはなかった。

「ヨルダンの9・11」はアンマンを
拠点にイラクへの医療支援を行おう
としている私たちにとっては衝撃だっ

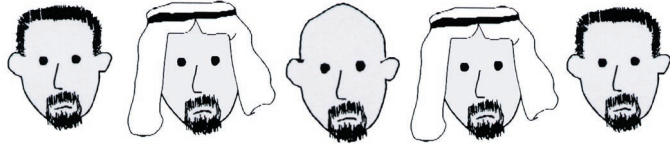
た。イラクやイスラエルと国境を接し
ながらも、治安のよい国だったヨルダ
ンがテロリストの暗躍する危険な国に
イメージダウンしてしまった。よく知
ったアンマンの町を歩くにも今まで以
上に警戒しなければならぬ。しかし、
もっと問題なのは国境をこえて行き来
する人や物だ。イラクからは医師や看
護師、臨床検査技師がアンマンのキン
グ・フセイン・がんセンターに研修に
やってくるし、ヨルダンからはイラク

国内の病院へ陸路で白血病やがんの治
療に必要な薬や医療器具を送り込まね
ばならない。治安の悪化はこうした支
援活動に大きな影響を与える。イラク
の病院の医師たちからはメールで薬の
リクエストが来ている。リクエストに
は要冷蔵の薬が含まれている。ヨルダ
ン・イラクとも寒くなつて来たとはい
え、保冷剤がとけてしまう前に、病院
に運び込まねばならない。ところが、
国境でのチェックが厳しくなり、従来

よりも国境を通過するのに時間がかか
るといふ。いつになく、薬の発注、荷
造りには神経を使った。イラクの病院
の状況、アンマン・バグダッド間の輸
送路の安全情報、イラク国内で寄付に
協力してくれるボランティアとの連絡
：イラク人のセキユリティーの確保と
情報を正確に伝えるためにアンマンの



ラナちゃんワークショップでTシャツ作成



インシャアラ

井下 俊 (JIM-NET医療コーディネーター)

もちろんこれは常套句であり、言葉通りの意味はない。タクシーの運転さんはエンジンをかけてハンドルを握り、的確な方向に車を走らせるし、知人も朝には目覚ましをかけて約束の時間に来ようとする。なぜこのような言葉を使うのか？何かとお世話になっている薬剤師のハイサムさんに訊ねると、「人がいくら望み努力しようとそれが

イスラムの国へ行くと、何かにつけ「インシャアラ」という言葉を耳にする。「神様が望んでいらつしゃれば」という意味だそうだ。タクシーに乗って「ヨルダン大学まで」と言うと、タクシーの運転さんは「インシャアラ」と言う。関西人の私は、「いく気あるのかよ！」と軽く突っ込みを入れたくなる。ヨルダン人の知人と「じゃ、明日朝8時に」と約束すれば「インシャアラ」。来る気あるのかよ、と少々不安になってしまふ。

例えば、私は子どものときから「インシャアラ」の精神に則っていた。学校の試験で、ほとんどの同級生は試験開始直前まで参考書やらノートやらを広げて必死に勉強をしていた。それが私は嫌いだ。得意不得意に関係なく、試験直前にドタバタするのは好きでなかったから、試験直前は勉強など静まり返っているクラスルームで、一人ひとりと話をしながら周囲の響きをかかっていた。私にすれば、直前に見て覚えたものが試験にでて、それでいい点を取ったとしてもそれは無意味だと思っ



ラナちゃんTシャツ完成!

薬剤師やJIM-NETイラク人スタッフにアラビア語で電話をかけてもらいできる限りの情報収集と段取りをして薬を送り出した。約36時間後、バグダッドの病院に薬が無事到着したことを確認した。薬も十分冷えた状態で届いたという。

イラクのモスルの病院からは小児がん科医のリカ先生が無事ヨルダン入りして、がんセンターでの研修が始まっている。そして、今日はがんセンターで治療を受けているイラクやヨルダンの子どもたちを対象にTシャツ作りのワークショップを行った。子どもたち

ちは点滴を固定したままの腕で、イラクの白血病の少女が描いた絵に一生懸命、色を塗る。アイロンで仕上げ、シャツを手渡すと、「シユ克蘭」「サンキユウ」にこつと笑って受け取る。私はこの笑顔を見るために今、ここに来ている。一人でも多くのイラクの子どもが笑顔を取り戻す手助けをするために……。



ハイサムさん、西村さん、リカ医師



た。少なくとも授業は出ていたわけだから（といっても眠っていることも多かったのだが）、一夜漬けの知識抜きで試験に臨み合格すればそれでよし、失敗してもそれが実力だと割り切っていた。いつも試験前は「後は野となれ山となれ」あるいは「矢でも鉄砲でも持ってきやがれ」とい

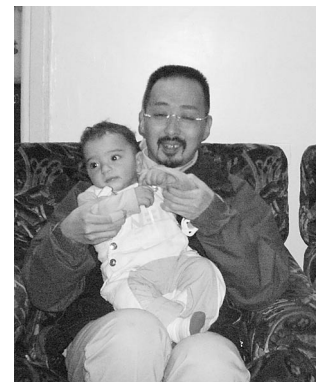
った心境だった。おかげで、暗記がものという歴史や英語では度々赤点を取っていたのだが、それでも私は試験直前の勉強はしなかった。私にとって試験直前は「インシャアラ」の境地だったのだ。



本を使って身長測定

この「インシャアラ」の精神に則っていた結果、医者になっていた。もちろんそこそこは努力した。しかし、必死になつて自分の運命を変えてやろうというほどの努力でもなかった。20歳の時、現役で入学していた大学を中退し、翌年医学部を再受験したのだが、合格できなければ18歳のときから始めていた尺八の道で生きていくか、とのんびり構えていた。鉢巻締めて一心不乱に勉強することなどまったくせず、結果的に医学部に合格し、その後大学で1年間ダブリはしたが、そこそこの医者になつている（と思う）。

「インシャアラ」と唱えて軽く生きていくのは心地よいものである。受動



的で怠惰な人生観だと非難もされようが、何かと思うようにはいかなない人生をそれなりに楽しむためには必要な考え方だと思う。もつとも、もがき苦しまずに医者という社会的地位を得て、お金も心配することがなく、そこそこ健康であるからこのようなことが言えるのかもしれない。しかし恵まれていくように見える私でも悩みはある。40歳を過ぎても結婚をしていない私は後ろ指をさされたりするのだが、「これも運命だ。インシャアラ」と考えればいくらか気が楽になる。気楽になるからいけないのかもしれないが、自分の



アンマン会議で、佐藤真紀、井下医師、現地医師

のは神（自然）の前では取るに足らないものです。すべてのことがうまくいくといつたら大きな間違いですよ。すべてのことは神様の思し召しであり、それに人間は従わなければなりません。」という意味もこの言葉には含まれている。

追記：どこかのキリスト教原理主義めいた大統領も、傲慢さを捨てて「God Bless You」の代わりに「インシャアラ」と言うようになれば世界は良くなると思つています。

人生を神の手に委ね、その手の中でのんびりしておけば安楽そのものだ。

こう書けば「インシャアラ」といえば、他力本願的なお気軽な言葉と受け取ってしまうかもしれないが、この言葉にはもうひとつ大事な意味が含まれている。それは、人間の傲慢さを戒めていることだ。「人間の所業というも

人智は万能であり何もかも思い通りになる、すべてのものを人間の力でコントロールできる、という考えは大きな誤りだと私は思う。現在の環境問題や、21世紀になつても紛争に明け暮れる世界の愚行をみればそれは明らかだろう。愚か者の人類は、その愚かさを自覚し、謙虚に生きていかねばならない。宇宙から見れば人間なんてちっぽけな生き物だ。ちっぽけな人間が、その欲望を満たすために傲慢になつて、好き勝手な振る舞いをしちゃいけません。インシャアラ。



呼びかわすこと

宮尾 彰

No.22



写真提供 本橋成一

一月ほど前、上田の骨董屋で文机を買いました。いつものようにこぎれいな店内を一巡したあと、私はお茶をいただきながら器を拝見していました。やがて、店主との話題が焼き物からそれらを陳列するための棚やお膳に移り、「これなんか実がいいですよ」と勧められたのです。奥行き一尺、横幅三尺、高さ一尺。それはちょうど時代劇などで見る寺子屋で使われた類のもので、一人その前に座すのに最適な大きさをしています。久しぶりの一目ぼれで、翌日お金を都合して迎えに行くと、もうそれは店の入り口に立て掛けられて私を待っていました。

さっそく自宅に持ち帰って、布で簡単に拭いてみました。材質は不明ながら、時代の付いた濃い褐色と、吸い付くように柔らかな手触りです。

心中、この文机の上に置くものは決まっていました。それは、三年前に手に入れた小さなブロンズ彫刻です。作者のズビネック・セカールについては以前にご紹介したことがあります（『忘れないために②』本誌第五十四号）。

長い間この作品を置く場所が定まらず、私は作品を活かす術を思い巡らしてきました。やつとの思いで購入したものの、私自身がこの作品を本当には自分もののできないまま過ごしてきたのです。

私は作品を手にとると、静かに文机の中央に据えてみました。すると一瞬、

彫刻が「ぶるっ」と身震いし、「どくん」と血が通いだす音がしました。

「うわっ」と小さく呻いたのを、今でも覚えています。そしてそのとき、私の中に今までに経験したことのないひとつの感慨が湧いてきたのです。

戦争の世紀、強制収容所での殺戮を潜り抜けて創作に生きた作家の彫刻と、江戸の昔から、静まって書に向かう人間と時間を分かち合ってきた文机。

いずれも、人間の手によって造り出されたモノです。不思議なことですが、その動かない姿にも確かにひとつの出会いが刻まれています。

「人間とは何か」を問い続けたセカールの孤高な精神を、黒く沈んだ文机の平面がしっかりと受け止めて、そこから静謐な空気が流れ出して止みません。しばらくの間、私は半ば茫然として彫刻と文机の前に座っていました。

おのおのが自己を現成するとき、おのづからの調和ができる。時節因縁、時節到来してそれが契ふ。それを感應道交といふのである。

唐木順三『禪と自然』



写真提供 本橋成一

数年の時を経てようやく、この小さなブロンズが「私のもの」になりました。以来、慌ただしく過ぎる毎日の僅かな時間を、私は文机の前で過ごしています。「感應道交」を、唐木氏は別の場所で実に簡潔に「互に呼びかはすこと」と書いておられます。

深い沈黙の内に、彫刻と文机から私は学びました。便利な道具を用いずとも、私たちは本来、時空を遥かに超えて「呼びかはす」存在なのだ。

ミンスク遠隔医療国際会議

滝沢 正臣

信州大学医療情報部

した。

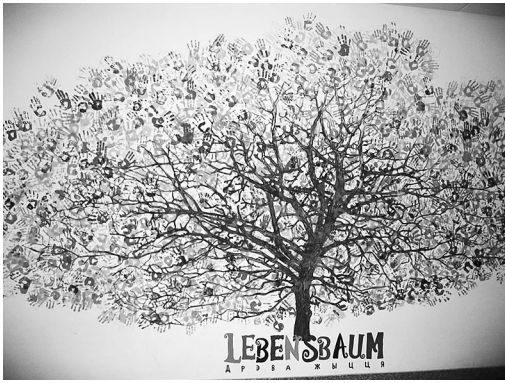
最後に訪問したのは2003年で2年が経過していることから、その後のベラルーシを見たい気持ち、一方、ベラルーシ国立小児血液腫瘍研究センターの遠隔医療システムが故障しているという情報があったので、これも調べてみたい、ということで演題を出すことになった。

準備

内容は、これまでの信州大学病院とベラルーシの病院とのインマルサット衛星を使った遠隔医療の経験、これに現在進行中の小児遠隔ケアネットの問題を加えて話すこととした。

ミンスクへ

11月4日から12日までの旅に出発した。故障した小児血液腫瘍研究センターの遠隔医療システムの電源トランス2個が入ったトランクはずしりと思



国立小児血液腫瘍研究センターロビーの手形ツリー

7月のある日、ロシア語訛りの日本語の電話があった。ベラルーシ大使館からで、11月にミンスクで行われる国際会議に出席してほしいという要請であった。しばらくしてミンスクからメールが届いた。ベラルーシ科学アカデミーからのもので、ミンスクで開催される国際会議で講演してほしい、ということであった。会議の名前は「A I T T H 2005、正式名は「International Conference on Advanced Information and Telemedicine Technologies for Health」、1998年から続けている国際遠隔医療支援に関する」と解釈

い。ベラルーシへはこれまで神谷さんが同行してくれる旅なので安心感がありストレスがあまりなかったが、今回は一人旅なので若干の不安があった。このためドイツで一泊余計に泊まり、ライン河の秋を楽しんでからミンスクに入った。空港までA I T T H の車が迎えに来てくれたのでタクシーとの値段交渉はしなくて済んだ。ミンスクの空は暗く、霧に包まれていた。木の葉は5割方落ちており、気温もフランクフルトに較べ4〜5度は低く感じた。久しぶりのベラルーシホテルは外観は変わらなかつたが裏に大きな温水プールとテニスコートができていて皆喜んで。もちろん旅にはかならず水着を持参する僕には、これまでのミンスクとは大きく変わった生活が送れる、と大いに喜んだが会議が始まってからは、レセプションやバレエ観劇と帰りが遅く、利用する時間がなくて残念だった。ホテルにはイリーナさんが出迎えてく

れた。これでロシア語の不安はなくなる、と喜んだが、彼女はモスクワに用事があるとのことで、会議初日の8日までついていてくれることとなった。

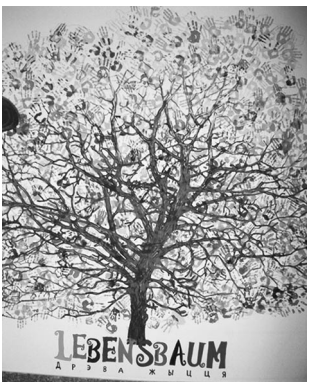
国立小児血液腫瘍センターで格闘

7日に国立小児血液腫瘍研究センター訪問に出かけた。この日は革命記念日でオルガ院長は不在だったがMEのアリョーシャさんが迎えてくれた。イリーナさんによれば、革命記念日はもうロシアにも無いそうである。

センターのロビーにあるこどもの手形ツリーも横に大きくなった(28P)。下図は前回訪問の2002年3月のもののである。このこども達の何人が元気で成長しているであろうか。

懐かしい3階の遠隔診療システムの部屋に入る。配置は変わっていない。

ツリーの木の葉は、入院した子どもの手形



い。さて、それからが難行であった。故障した二つの電源トランスを取り替えたが装置は動かない。再立ち上げなどを試みたが同じで、ついに日本無線

芦田氏に電話し、助けを借りる。ベラルーシで通じる携帯電話の有難みを感じる。追跡してゆくとインマルサット衛星通信装置、テレビ電話装置は問題ないことがわかったが、両者を結ぶコンバータ装置に問題があるのではない



AITTH2005の、アゼルバイジャンやモルドバ、グルジアなどからの参加者

か？という結論に達した。アリョーシヤさんと共に10時過ぎから始まったチエックは午後1時過ぎに終わったが、修理できなかった重苦しさを感ぜながらセンターを後にした。長時間の日本との通話でJCFにご負担をかけたかもしれない。

善後策は、小池先生、神谷さんと相談することにしたが、修理できないとセンターと日本との遠隔診療ができないので、個人的にはできるだけ早く修理したいのだが、日本とベラルーシの距離、通関処理について大きな障壁を感じてしまう。

会議

会議当日が来た。ホテルから10分ほどの距離にあるベラルーシ科学アカデミー情報科学研究所のホールが会場であった。ロシア語圏の会議は初めてなので緊張する。プログラムでは、私他にアジア、北米からの講演者はなく、

ゴメリ州立医科大学からの発表に長崎大学の山下、高村両氏の名前があるだけであった。笹川財団の支援で敷設されたミンスク・ゴメリ間の光回線によって甲状腺組織のデータベース化が進み始めたようである。会議には120名の参加者があり、地元で40%、ロシアが25%、ドイツやイギリス、イタリアから15%であったが、興味を引いたのはそれ以外の、アゼルバイジャンやモルドバ、グルジアなどのロシア語圏からの参加者が多かったことで、我々の発表に大きな関心を持ったようで、自分の国への遠隔医療システムの設置を希望した参加者がいた。市長招待のパーティーや観劇(バレエ)などこの国では経験したことのないイベントで暗い冬のベラルーシと、華やかな夜の交歓とはまったく対照的な感じであった。

治療知識や技術の底上げのために

今後衛星通信に期待

事務局・神谷さだ子

98年から始まったゴメリ、ミンスクとの衛星通信を使ったTVカンファレンスは、直線距離8000キロをカバーして、ベラルーシの白血病治療に役立っている。

ゴメリ州立病院から、放射線医学人間環境センターに移転した血液科では、スタッフはJCFとの協働を希望している。支援活動が15年を迎えようとしている今、培ってきた信頼をつなげていきたいと思う。

この秋、第81次訪問団が来年の事故20周年準備のために訪問した時、成人血液と集中治療室の責任者イーゴリ・イスクロフ先生から、医薬品のリクエストを託された。日本では見られない程、広大ですばらしい建物で、調査研

究と治療のための施設ではあるが、医療環境は決して十分とは言えない。支援を始めて15年、この間ベラルーシの経済事情はずいぶん良くなってきたように思える。町には、ドイツからの商品がたくさん並び、宿泊するツーリストホテルは、ビジネスホテル風に改築された。

しかし、まだアンバランスが見え隠れする。近代的な建物の中に博物館行きのような医療機器が置かれている。治療知識や技術を吸収したいと願う医師たちは、書籍はもとより、インターネットを使うこともできない。

信州大学の滝沢正臣先生は「衛星通信は、通信手段として最悪状態で使うものです」と言われる。通信費もとても高い。そこで、ミンスク情報技術セ

ンターに出かけ、インターネットを試された。国際会議の場で、試行されたゴメリ・ミンスク間の光ファイバーによる通信が、時々途切れ、非常に通信状態が悪かったことが、そこでも同じように判明した。回線の許容量が非常に小さい。これでは、インターネットでのTV会議など不可能である。なんとかならないものだろうか。ことベラルーシに関しては、もう少し時間がかりそうである。

現地医師の自立と医療の底上げのために、この衛星通信システムに頼らなければならぬ。

11月7・8・9日、ミンスクで開かれた遠隔医療の国際会議で成果を発表された滝沢先生は、モルドバやアゼルバイジャンの関係者からも興味を示され、協力を求められた。しかし、一歩ベラルーシに対して、時間をかけて関わっていくことが当面の課題となる。

ジーマの

ロシア話

◆地獄の見学ツアーです。あるボイラーには、蓋が沢山あり、蓋の上に石が一杯積んである。ガイドに理由を聞くと、

「ここではユダヤ人が焼かれる。しかし、一人でも外に出ると、他の連中を皆連れ出してしまうから、蓋と石はその対策だ」

次のボイラーに移ると、蓋がない。

「ここはロシア人だ。しかし、逃亡の心配はない。つまり、一人でも外に出ても、残りの連中はあいつを必ず戻してしまう」

3番目のボイラーにも、蓋がない。

「ここはドイツ人だ。そいつらは簡単だ。つまり、こちらで一線を引いて、『横断するな』と書いただけだ」



◆父は、誕生日パーティーで、バースデイケーキが運ばれてきた時、グデングデンになっており、まだ火のついていないろうそくを吹くことになった。

「そのために、ひどく酔っ払う必要はないのに…」

「待ってくれ、グデングデンだったよ。ケーキに吹くと、蝋燭の火がついたほどだ」

◆「鳥のインフルエンザに罹った鶏を食べていいですか」

「いいです。しかし、食べた後、その骨を焼くべきです」

——ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート——



АНЕКДОТ



◆Идет экскурсия по аду. На одном котле очень много крышек и он завален камнями. Экскурсанты спрашивают экскурсовода, почему.

- Здесь варятся евреи. Если хотя бы один сумеет выбраться, обязательно перетащит всех остальных. Дальше экскурсанты видят котел, который не прикрыт ничем.

Экскурсовод:

- Здесь русские. Мы за них не боимся. Даже если один сумеет выбраться, другие все равно заташат обратно.

Дальше наблюдается третий котел, на котором тоже ничего нет.

- Здесь немцы. С ними все просто. Мы начертили линию и написали "Не перелезать".

◆- Мой папаша на своем дне рождения так напился, что когда принесли пирог, стал дуть на незажженные свечи.

- Ну, для этого не обязательно быть сильно пьяным.

- Ты погоди, я же тебе говорю, он так напился. Подул, и свечи загорелись.

◆- Можно ли есть кур, зараженных куриным гриппом?

- Можно, только кости нужно сжигать!



モスクワ便り

ロシアでは、空手・合気道・禅の修行から日本式家屋・すしバー・カラオケに至るまで様々な日本的なものへの興味がますます増えています。最近人気があるのは、〈マクロビオテック〉の食理論です。

その歴史は、何千年の昔、中国、チベット寺院にさかのぼります。しかし、この理論が有名になったのは、日本人・オーサワ・ジョージ教授のおかげです。人間の基本的な食べ物—毎日の摂取食品量の60%を占める穀物にこの理論の本質があります。生野菜よりもずっと少量の温野菜を食べなければなりません。乳製品は大人には、あまり必要がありません、肉はほとんど食べなくても大丈夫ですが、果物は少し食べてもいでしょう。果物は、あなたが暮らしている地域で育ったものを、暑い季節に食べるのが有効です。正しい食生活を勧めるたくさんの他の理論と違って、水をたくさん飲むことを勧めません。補給する水の量は、野菜や炊いた穀物で十分です。塩はいいが、砂糖は有害です。

それは、ダイエットではありません。自然と調和する人間の生命哲学です。その根本には、あらゆるものを〈陰〉と〈陽〉に分類する要因があります。暖かいと冷たい、強い身体と弱い身体、能動的と受動的、遠心的と求心的。物理的、心理的そして人間の精神的な健康—それは、すべてに〈陰〉と〈陽〉が等しく保たれている状態です。あらゆる食品もまた〈陰〉（砂糖・チョコレート・ジャガイモ・トマト・キュウリ・甘い果物・水など）と〈陽〉（塩・そば・ライ麦・卵・にんじん・カボチャ・タマネギなど）に分けることができます。正確に食品を組み合わせれば、等しく身体に〈陰〉と〈陽〉を調整し、しだいに病気から逃れることができます。基本的な食べ物は生野菜と果物だと見なしているダイエット反対論者達は、こう質問します。〈なぜ、オーサワは胃がんで死に、80才まで生きなかつたんですか？〉実際、不思議なことです。しかし、誰が正しいか理解するためには、すべて個人個人で試してみる必要があります。私は月曜日から、マクロビオテック論に則って生活しようとしています。ついに痩せることができるかも？

イリーナ・ニコラエワ（JCFモスクワ事務局）

ベラルーシの食卓

にんじんを食べよう

チェチェルスク保健局の放射能測定師ターニャさんは、仕事もテキパキこなすが、料理も手早く美味しい。以前、チェルノブイリの現状報告のため日本に招待したことがあった。何にでも好奇心旺盛、意欲的なターニャさんと松本のスーパーに買い物に行った。スーパーに並んだ商品の豊富さに驚き、いろんなものを手にとって「これは何？」と聞く。ところが半加工品がストックされている冷凍庫は一瞥したまま、手に取ろうともしない。お肉がミンチされていたり、薄切りにされて売られていることにも、うなずくだけ。結局、まるごと野菜をかごに放り込んでいった。

事務所の台所で、にんじんをまな板の上に乗せ、皮をむこうとすると、テキパキのするどい声がとんだ。「どうして、こんなにきれいなのに、皮をむくの？」そう、チェチェルスクの食品店には、ちいさな泥付きのにんじんが普通なのだった。見栄えは悪くても、ターニャさんの手にかかり、食卓に並ぶにんじん料理は、とても美味しかった。ちょっとした味付けで、にんじんをいっぱい食べてしまうのだ。その日は、彼女が腕をふるって食卓を飾ってくれた。

〈材料〉

にんじん 500 g、パン粉 100 g、卵 6個、砂糖 半カップ、バター 100 g、干しぶどう 100 g

〈作り方〉

1. にんじんをゆで、おろしガネで千切り状にする。
2. 卵を黄身と白身を分けておく。
3. にんじんに、パン粉・黄身・砂糖・バターを入れ、ざっくりまぜ合わせる。
4. 干しぶどう・少々塩・泡立てた白身を入れる、ゆっくりまぜる。
5. 内側にバターを塗ったお鍋に入れて、オープンで焼く。



“悲しい事実”を忘れない

中野実佐雄



10月21日、塩尻のレザンホールでドキュメンタリー映画「にがい涙の大地から」を上映しました。7月の松本上映会（主催・戦後60年を問う会・まつもと）に引き続きの開催です。塩尻で上映するのに、25名ほどの実行委員会が組織され企画運営にあたりました。その内、10人ほどは松本の上映会で映画を見ており、その多くが「この映画をもっと多くの人に見てもらいたい。」という気持ちで実行委員会を立ち上げました。塩尻で福祉や環境に係る映画などの自主上映会を行ってきた人たちがメンバーとして参加したことにより、多くの、そして幅広い実行委員会が構成できたと思います。準備期間が2ヶ月ということもあり、上映会を開催するという点に重点が移つ

てしまい、実行委員同士の交流が十分にできなかったのは残念でしたが、実行委員会を開催していく中で、戦争経験のある実行委員から体験を聞く機会もあり充実したものとなりました。上映会には約400人もの方が参加（カンパとして買ってくださった方も含めて）してくださり、大成功でした。上映会には、より多くの人に集まってもらいたい。特に若い世代の人に来ていただきたい。そんな思いからさまざまな取り組みも行ってきました。アンケートの回収状況から見ると10代、20代の入場者の回答が20%に達しており、若い年代も大勢参加したと思います。アンケートの内容をみると、60年前の敗戦時に日本が化学（毒ガス）兵器を遺棄してきた事実を知らずに今回の上映会で初めて知ったという意見が数多く寄せられていました。上映会を開いた大きな意味がここにあったと思います。

戦争が終って60年。日本の平均寿命が80歳くらいですから、敗戦当時20歳だった人は、すでに平均寿命に達していることとなります。戦争経験者に戦後60年はあっても、戦後70年はない。といわれるのはこのためです。今年の報道をみても、キーワードとなっていたのは「語り継ぐ」でした。今、戦争で起こった事実を語り継いでいかないと、もうできなくなってしまうと感じています。『過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。』1985年のヴァイツゼッカー大統領（当時、西ドイツ）の有名な演説です。私達が今しなくてはいけないのは、過去の事実をきちんと見据え伝えることであると思っています。

でも心に響かないと思っています。加害者であるか、被害者であるかを問わず、戦争を経験した人にとって、60年前の出来事は現在においても“悲しい事実”であり歴史ではないのです。その事実を聞かされたとき、本当の戦争の姿を現実のものとして捉えることができるのではないのでしょうか。過去を歴史として捉えるのではなく、事実として認識していくことが大切であると思っています。その中からこそ、平和の重要さを知ることができるのだと思っています。

「悲しい事実」
愛する人を祖国に残し自分の憧憬と命を犠牲に
ただ「お国のために」と幾万の若者が砲火の下へと身を埋めていった
いつの日か戦いが終わり平和な暮らしができることを
心の底で願っていた兵士も
遠く南方の海に沈んでいった
戦いの終わりには誰もが平和を願うのに
事実が歴史へと変わってしまう頃には
真実の平和を忘れてしまう
時が流れて戦争を知る人がいなくなった
時にも
歴史に隠れた悲しい事実を明日への平和の願いとともに忘れてはいけない

戦後憲法という都市の住民

伊東良造

未来を創り生きていくことの最も集約的な表現を前文に持つ戦後憲法を、私は都市の論理＝原理だと考えています。この場合の都市とは、天皇条項等をのぞいた憲法の諸項目が実際に十全に働いた場合の自由な共同社会のイメージということですが、それはしかし現実の都市的なのがいかに不十分な実態であっても、その土台である憲法は決して理想ではなく日々現実として作動してはならないのですから、この一種バーチャルな都市は単にイメージではなくリアルなものはずです。

実際今日までかろうじて作動し続けているこの都市＝憲法は、しかしその

成立直後からずっと風雨に晒され続けていたというのが本当のところでは。憲法は国民の間に定着したというのは半分は神話にすぎず、朝鮮戦争前後からずっと、特に九条二項に対するそれほど高い支持率はなかったのです。日本人は経済成長の中で今より不安が小さかった（冷戦は日本ではおとぎ話だった）ころは、ただそれを忘れることが出来ていただけなのかもしれせん。

現在をよく日中戦争前夜と比較する向きがありますが、既に自由が窒息させられ、そのうさ晴らしのように大衆芸能だけが妙に華やいでいた時代よりも、アメリカと共同歩調を絶えず取っ

ていたという、現在との同一性も明確な上に、占領下とは言え表向き「民主主義的」で「啓蒙的」で戦争の傷跡もまだ生々しかったはずの社会の中で、不安をあおられて次々自主規制的に賛化していった朝鮮戦争前後あたりからの歴史と比較する方が教訓的です。読者のみなさんはどうかこの時代の諸事実を、国民の意識の危うさを、おさらいしてみてください、戦慄するものがあります。

天皇の戦争責任免責のように日本人は戦後のはじまりから実は「歴史修正主義国家」として出発することを自らに許してしまったという、不安とは一見逆な傲慢さがこれらの事態の深淵としてあり、ドイツの「ナチの犠牲者中傷罪」と同じような法ひとつつくることもなく、自己閉塞化によって出発したからこそ内外への不安を増幅させていったのでしょう。

しかし同時にこの都市＝憲法に守ら

れながら戦後日本人は現実の都市へと

流れ込み、当初はたしかに都市的理想を手に入れようとしたのですが、徐々に「消費は美德」からローン地獄、サービス残業、農村崩壊の放置にいたる商品経済の掟だけが肥大し、不安はふくれ上がり、そこに甘やかな繭で出来たシエルターであるかのように誘惑するナシヨナリズムが全天を覆うまでになつてしまった訳です。補陀落渡海の外あてのない舟に等しいこの幻の繭は外から見れば原発廃炉の石棺が、不気味なイージス艦のような姿をしているでしょう。「社会のメルトダウン」と言う表現が単なる比喩であることを越えてしまったと思われる現在、ナシヨナリズムに希望を抱く人々が外の「劇物」から身を守るのだと、内側から壁を厚くしている、そんなある種悲惨で滑稽な図が頭を過ぎります。私たちはこの内部から壁を塗りがためつつ同時に脱出せねばなりません、出来ることな

のか私にはわかりません。

気が減入って幾重にも不安になりますが、戦後憲法にはこんな不安に甘い言葉で答えてくれる条文、また国のために奉仕すれば国家が守ってくれる式の保護者意識の条文もあります。逆に戦後憲法は国家を超えて世界にはたらきかけることを私たちに厳しく要請

しています。実はこれこそがこの憲法の晴れやかなところではないでしょうか。特に前文の晴れやかな厳しさを私は愛しています。それに対して何も答えられない私ですが、そんな私でも、この「青空」だけは手放したくありません。



振替用紙のメッセージから



- ◎イラクの人々に希望を与えたいと思っています。少額ですがお役に立てればと思っております。(東京都)
- ◎ドリーム2、3の頃から続けています。もうドリーム10だなんて早いですね。子ども達に輝く笑顔と幸せがありますように。(神奈川県)
- ◎生まれて初めて原爆ドームへ行ってきました。一人旅です。(神奈川県)
- ◎パンやの応援の缶からの応援…。(石川県)
- ◎パキスタンで又大地震がおきました。心痛みます。皆様のお働きに深く感謝しております。お身体お大切になさってください。(千葉県)
- ◎終身治療を加害者に訴える！人々の苦しみを知りなさい。(京都府)
- ◎学級の子供達の笑顔を頭に描いて…。(東京都)
- ◎このような時代だからこそ、「事務局ガンバレ！」という気持ちをこめて患った皆様へ。少額ですが治療費に使ってください。(徳島県)
- ◎文化祭での寄付です。(長野県)
- ◎昨年亡くなった叔母のお金の一部です。内科医の妻でしたので、病気のために、子供達のために使ってもらいたいと思っております。(愛知県)
- ◎「JCF15年の歩み」の行事日程をお知らせ下さい。期間が長いので、参加させていたただきたいと思っております。(静岡県)
- ◎グランドゼロ口有り難うございます。学生さん達が頑張っていらいっしやるお写真を拝見して幸福を感じます。(栃木県)
- ◎イラクの子どものために危険を冒してでも活動する皆様に感謝と尊敬の念を表します。(東京都)
- ◎鎌田先生の「がんばらない」「それでもやっぱりがんばらない」を読んで感動しました。少しですが。(北海道)
- ◎いつもありがとうございます。ほんの少しですが協力させて下さい。匿名会費を納入します。また色々お手伝いしますね。(長野県)
- ◎鎌田先生の熱意に感動しました。子供の笑顔が戻りますように。(東京都)
- ◎仲間にカンパを呼びかけたが、反応はなかった。老人になると時間にも余裕ができるので、世界で起こっていることに関心が持てるだろうに。若い人に恥ずかしい。(長野県)
- ◎以前訪問させていただいたチエルノブイリ原発に新シエルターが2009年に完成と聞きましたが、核燃料回収の難問が残っています。事故を風化させないように願う者です。ほんの気持ちですが。(長野県)
- ◎インターンシップの際は貴重なお話ありがとうございます。訪問させて頂いて以来、こういう問題に対してもっと勉強したいと思いました。微力ではありますが、寄付させていただきました。(東京都)
- ◎湾岸戦争、イラク戦争で白血病を患った皆様へ。少額ですが治療費に使ってください。(東京都)
- ◎百葉で鎌田實先生に出会うことができ、幸せに思いました。見離さない放り出さない医療を続けていらいっしやる先生のような方がもっと多くたんじょうして欲しいです。(東京都)
- ◎子供達に未来を！(母の遺産です)(長野県)
- ◎わずかですが…直接何もできないけれど、こういう形で少しでも子どもたちの助けになればと思います。あとは祈るのみ…。(長野県)
- ◎静かに応援を続けていきたいものです。(石川県)
- ◎8月10日穂高西中学校での講演はボランティア活動でしたのに謝礼を町の教委から支給されました。その全額を寄付いたします。(東京都)
- ◎「雪とバイナツプル」の話に感動いたしました。(長野県)
- ◎アンマンでテロが発生しました。皆様のご無事を祈っております。(東京都)



アトリーちゃん：出会い

ВСТРЕЧА



アナトリーさんの焼き肉

スタディツアーの後はいつも参加して下さったみなさんから、メール、お手紙、お電話でお礼や感想を頂戴します。今年の夏のスタディツアーの後も参加された方から沢山の感想を頂きました。今回のツアーでは参加されたどなたも口を揃えるのは、東海医療工学専門学校の学生さん達は素晴らしい、ということでした。

「爽やかで行動力があり、機器メンテナンスという専門技術はもとよりマジックや、バイオリンの演奏などの特技を活かして病院の子ども達との交流でも活躍、彼らと出会えたことでも、このツアーは私にとって一生忘れられない旅になりました」と書いて来られた方もありました。

学生達のツアーは、JCFメデイカルエンジニアチームのリーダーで、2003年から東海医療工学専門学校講師として赴任された廣浦さんが

ている学生さん達を応援しようと、文化祭前々日、百人分のボルシチを煮込み、焼き肉コーナーの販売用に差し入れることにしました。
スタディツアーに同行した、ME (メデイカルエンジニア) の小池さんが文化祭に車で行かれるということで、大型タッパー3個に容れた百人分の

ボルシチの運搬をお願いすることにしました。そしてボルシチと一緒に布山も運搬して頂き、みんなの心を虜にした学生さん達の文化祭取材することになりました。

前日までの雨も晴れた早朝、百人分ボルシチを積み込んだ小池さんの車のMEの西澤さんと一緒に乗り込みました。車のドアを開けたとたん強烈なボルシチの匂い、小池さんが言います、「昨日積み込んで家で運転する間も後ろでチャプチャプ聞こえてき、学校に到着した時、こぼれて何も無かったらどうしようかと心配で…」

雨上がりの高速、転倒している車を見てドキドキしながら名古屋屋に向かいます。3時間前から9時前には東海医療工学専門学校の、西加茂郡三好町に到着、文化祭日和に晴れ渡った学校の前で、廣浦さんがニコニコ顔で迎えて下さいました。



文化祭であの焼き肉の味が再現できるだろうか！

バスポート写真で見覚えのある学生さんが何人か駆け付けて、現地での作業を指導した小池さんや西澤さんと感動の再会、てきぱきとチャプチャプボルシチタッパーを会場へと運んで行きます。
校長先生からも丁寧な挨拶を受けた後、焼き肉を準備中だという文化祭会場の下見に、中庭に案内して頂きます。



アナトリーさんのダーチャでの焼き肉の味が忘れられない



西澤さん(左)、小池さんも大満足

神谷や小池ME(実は調理師の資格も持っているらしい)のアドバイスを受け、二度の試作失敗を乗り越えた下準備済みの肉が用意されています。何かマヨネーズのサラダのようにも見えるお肉を次々に串刺しする人、火をおこす人、釣り銭やポップの準備をする人、遠来のボルシチ販売の準備をする人、阿吽の呼吸でそれぞれが準備を進めています。私も持参したエプロ



医療機器が立ち並ぶ臨床工学科教室

きます。笑いながら見ている私に、リーダーの柴田君がさっと近づいて来て、「布山さん、まだ校内のご案内していませんでしたね。失礼しました。今、お時間良ければご案内します。」ボルシチ鍋係りを他のメンバーに託して学校内の探検です。学生さんのベラールシ報告の前に、JCFの活動紹

介をして欲しいと言われて、パワーポイントによるプレゼンテーションを用意してきました。柴田君は、その準備の時間もこの後となります、と段取りもしっかり。さすが廣浦先生の生徒さんだなあと感じます。しかもそういう行動がとても自然で、各々の得意な面(パソコン操作だったり、料理だったり、マジックだったり、声帯模写だったり)を発揮しながら、時には今風若者会話を交えて飄々と進めていきます。医療工学の専門分野でも優秀であり、いろいろな資格も取得しているそうなのに、臨機応変にサンドイッチマンに



模型の赤ちゃんも呼び込みに動員

ンを付け、スタッフの端っこに陣取りました。お天気は回復したものの、強い風で火の番は大変そうですが、アナトリーさん流に、炎が立つと水をかけて火力調整の手つきも手慣れたもので、まずはテストパターンの焼き肉を焼き始めました。ハーブのいい香りと油が火に落ちる香ばしい香りがあたり一面に漂っている感じがします。「布山さん、味見して下さいー」紙コップに入れられた焼き肉は、所々に美味しそうな焦げ目がついて、でも全体は白っぽいお肉の上にグリーンのハーブが散ってなかなか見た目も美しい、と口に入れると、ジューシーで甘いお肉の味と爽やかなハーブが香り立ち、しかもお肉の歯ごたえも楽しいとつても美味しい焼き肉！

小池さんと西澤さんもVサインで、「おい、最高だよ。大成功じゃん！」

10時になりご近所の家族連れや、お



すっかり駅員さんの西村君

なれるフットワークの良さや来客へのもてなしと心遣い、原発や国際協力への問題意識、そういったいろんなものが肩肘はらずに同居している若さのパワーが素敵でした。

学校探訪とパワーポイントのテストが終わって会場に戻ってみると、焼き肉は完売、苦戦していたボルシチも鍋の底が見え始め、舞台では西村君がJRの制服姿で駅の構内放送の声帯模写を熱演しています。どうやら事務局のおばさん達の心配は文字通り「老婆心」に終わったようです。(この日の売上はJCFに寄付して頂きました)午後のスタディツアー報告会も、校



サンドイッチマンで校内一週

年寄りを交えたお客さんが入ってきました。今日は無料で骨密度の測定や骨粗鬆症講座もあり、こういったデモンストレーションで地域の住民との交流も目指しているとのこと。焼き肉の美味しそうな匂いと元気な呼び込みで、焼き肉はみるみる売れていきますが、ボルシチはなじみがないせいか、となりコーナーの文化祭定番の豚汁やカレー、おでんに押されて苦戦です。すると学生の一人が「俺、宣伝してきますー！」とボルシチキャッチコピーを書いた段ボールを身体の前後にぶら下げて、即席サンドイッチマンに変身出発して行

美味しい焼き肉を我が家でも再現してみたいので、レシピを下さいとお願いしたら、柴田君から丁寧なレシピメールを頂きました。皆さんもバーベキューの機会があったら試してください！

◎仕込みの成功例です。(約肉1キロ分です。)

1. タマネギ 1.5 玉をスライス (3 ミリ程度) その後、30 分ほど水につけます。
 2. 豚のもも肉 (3 × 2cm) の大きさをフォークで刺し、やわらかくします。
 3. 塩、コショウ (サンタフェスパイス) を肉を揉みながらかけ、コショウで肉の色が少し茶色になる程度です。
 4. たまねぎを水切りし、揉みます。
 5. たまねぎが少し、しなびた後、塩、コショウをかけ、揉みます。
 6. ウォッカを大さじ 2 杯程度入れ、よく混ぜます。
 7. りんご酢をウォッカと同量入れ、よく混ぜます。
 8. 神谷さんから頂いた香料を適量 (香りがする程度) 入れ、良く混ぜます。
 9. 全体が馴染んできたら、マヨネーズを適量 (全体がドロドロする程度) 入れ良くかき混ぜます。この時、たまねぎの味を確認して下さい。マヨネーズ、コショウ、香料のバランスが大切です。サラダ感覚で食べれる程度になれば完璧です。
 10. ここで、3 で味付けをしたブロック肉を入れ、9 と良く揉みながら混ぜます。全体に肉がなじんだら完成です。最後に香料を少し入れ、香りを出しても良いと思います。
 11. 冷蔵庫の中に 1 日置いておき翌日焼きます。
- 全体的に、塩、コショウ、マヨネーズは多く入れた方が、味がしっかり付くと思います。

焼き方は、文化祭の時と同様に、炭火で炎が出ない程度で、約 20 分かけ肉の中に火が通るようにします。

いろいろ練習しましたが、この手順が一番現地の味に近くなりました。



アナトリーさんのダーチャでの思い出の乾杯



文化祭に出かけるなんてほんとにしぶりでしたが、工学専門学校の特色を活かした文化祭でとても楽しく印象深い一日になりました。
東海医療工学専門学校のみなさん、ありがとうございました。(事務局・布山)

長先生はじめ沢山の校外外の参加者があり、チェルノブイリ原発事故について、また学生達のベラルーシでの体験を、沢山の写真や動画や音楽を使い説明して下さいました。



制服の白衣に着替え、スタディツアーの報告をする柴田君

文化祭での展示発表、ありがとうございました！

東海医療工学専門学校をはじめ、今年も沢山の学校の文化祭で、JCFの活動紹介、パネル展示をしていただきました。そのうちの1校、豊田市立末野原中学校の生徒さんからのお手紙を紹介します。

こんにちは。今回はJCFの活動資料や写真を送っていただいて、ありがとうございます。今までこういうことにふれることがなかったので、資料を読んで、チェルノブイリにはたくさんの方が苦しんでいることを知って、びっくりしました。

私たちが知ったことを文化祭の『世界を変えるお金の使い方』というコーナーで展示発表しました。JCFの紹介や設立した理由、今までの実績、歴史など色々なことを調べて書かせてもらいました。

私は調べているときこう思いました。「本当に小さなことで大勢の人が助けられるんだ。私もこつこつやれば、たくさんの方が救われる！」

今から私も、こつこつ小さなことを積み重ね、たくさんの人を助けたいです。苦しんでいる人が少しでも助かることを願います。

秋保まどか 世那城和菜

愛知県豊田市立末野原中学校1年



ニュースクリップ

< 国内 >

●美浜原発、1次冷却水漏れ

関西電力は、美浜原発1号機で、1次冷却水を加圧する加圧器につながっている非常用の安全弁から、放射能を含む1次冷却水のわずかな蒸気が漏れたと発表。出力降下作業に入ったが、さらに1次冷却水ポンプから水漏れが見つかったため、急きょ手動停止した。

(9月29日 毎日新聞)

●日本原子力研究開発機構が発足

日本の原子力の研究と技術開発をそれぞれ担ってきた日本原子力研究所と核燃料サイクル開発機構が統合された独立行政法人日本原子力研究開発機構(本部・茨城県東海村)が発足した。

(10月1日 共同通信)

●原子力政策大綱、閣議決定

政府は、原子力委員会がまとめた原子力政策大綱(旧原子力開発利用長期計画)を閣議決定した。原発の使用済み核燃料を再処理してプルトニウムを再利用する核燃料サイクルを従来通り推進するほか、高速増殖炉を2050年に実用化するなどの数値目標を盛り込んだ。

(10月14日 毎日新聞)

●玄海原発1号機が30年

佐賀県玄海町にある九州電力の玄海原発1号機が、設計時に想定していた耐用年数の30年を迎えた。国内で運転中の商業炉53基で30年に達したのは8基目。九電は来年夏以降の定期検査項目を増やすなど老朽化対策を実施し、今後も運転を継続する。

(10月15日 共同通信)

●再処理工場建屋の改造開始

青森県六ヶ所村の使用済み核燃料再処理工場の高レベル放射性廃棄物ガラス固化体貯蔵建屋など4建屋で冷却装置の設計ミスがあった問題で、経済産業省原子力安全・保安院は、日本原燃が提出していた建設中の2建屋の改造工事申請を認可した。原燃は改造工事を始め、終了までに2、3カ月かかるという。

(10月18日 共同通信)

●青森県が核燃中間貯蔵同意

三村青森県知事は、東京電力と日本原子力発電が同県むつ市に計画している使用済み核燃料中

間貯蔵施設の立地受け入れを表明した。中間貯蔵施設が全国で初めて具体化に向け進み始める。

(10月18日 共同通信)

●上関原発訴訟、中国電力が全面勝訴

中国電力が山口県上関町で建設を計画の上関原発をめぐる、反対派住民ら4人が炉心用地などに当たる地区共有地の入会権の確認などを求めた訴訟の控訴審で、広島高裁は、住民側の実質勝訴とした1審判決を取り消し、請求をいずれも棄却する中国電力側の逆転全面勝訴の判決を言い渡した。

(10月20日 共同通信)

●温室効果ガス排出7.4%増

環境省は、2004年度に国内で排出された温室効果ガスの総量が二酸化炭素換算で13億2900万トンとなり、京都議定書が基準とする1990年レベルを7.4%上回ったとの集計結果(速報値)を発表した。「90年比マイナス6%」という議定書の目標とは大きな開きがある。

(10月21日 共同通信)

●米原子力空母、横須賀に初配備へ

米国防総省は、08年から米海軍横須賀基地に原子力空母を配備すると発表した。同基地を事実上の母港とし、同年に退役予定の通常型空母「キティホーク」の後継艦となる。原子力空母の日本配備は初めて。

(10月28日 毎日新聞)

●イラク戦争帰還兵が講演

イラク戦争から帰還し、劣化ウラン弾による健康被害を訴えているニューヨーク在住の元米兵ジェラード・マシューさん(31)が妻ジャンヌさん(31)とともに、広島市の原爆資料館で講演し「劣化ウラン弾など大量破壊兵器をなくしていくことがわたしの使命だ」と訴えた。

(11月3日 共同通信)

●原発配管の番号を改ざん

昨年8月に起きた関西電力美浜原発3号機の死傷事故で、破裂した配管の交換工事を請け負った三菱重工業の作業員が配管をつなぎ間違え、気付いた後に配管に刻印されていた固有の製品番号を削って正しい配管の番号に改ざんしていたことが分かった。

(11月10日 共同通信)

●保安院が立ち入り検査

経済産業省原子力安全・保安院は、関西電力美浜原発3号機の蒸気噴出事故で破裂した2次系配管について、交換工事を終えた新しい配管の安全性を確認するための立ち入り検査を始めた。

(11月10日 共同通信)

●関電と三菱重を厳重注意

関西電力美浜原発3号機の復旧工事で、交換した配管の製品番号の刻印を三菱重工業の作業員

が削り、改ざんした問題で、経済産業省原子力安全・保安院は、関電と三菱重工業をそれぞれ文書で厳重注意した。

(11月16日 共同通信)

●柏崎原発訴訟、2審も住民側敗訴

東京電力柏崎刈羽原発1号機を巡り、地元住民らが「安全審査は不十分で違法」として国の設置許可取り消しを求めた訴訟の控訴審で、東京高裁は、請求を退けた1審判決を支持し、住民側の控訴を棄却する判決を言い渡した。

(11月22日 毎日新聞)

< 海外 >

●CTBT促進会議が宣言採択

国連本部で開かれていた包括的核実験禁止条約(CTBT)の第4回発効促進会議が最終宣言を採択、閉幕した。最終宣言はCTBT早期発効や、発効までの核実験停止の重要性を強調。その上で、条約の履行状況を検証するため構築される国際監視システムを通じて収集した地震波や大気中の放射能などに関するデータを各国の観測機関などに提供し、災害予防を進めることをうたっている。

(9月24日 共同通信)

●IAEA、イラン核問題で決議採択

国際原子力機関(IAEA)理事会は、米国や欧州連合(EU)などが当初求めていたイラン核問題の国連安全保障理事会への付託を先送りし、同国にウラン濃縮関連活動の凍結などを求めた決議を採択した。

(9月25日 共同通信)

●イランがIAEA決議拒否

イランのモッタキ外相は、イラン核問題のIAEA理事会決議について「法的根拠がなく、全く受け入れられない」と拒否し、濃縮開始やIAEAの査察の制限に着手する可能性を示唆した。

(9月25日 共同通信)

●米原発、安全装置の不具合放置

全米最大級のバロバーデ原発(アリゾナ州)で、原子炉の暴走を食い止めるブレーキ役である「緊急炉心冷却装置(ECCS)」の不具合が、運転開始から19年間放置されていたことが米原子力規制委員会の検査でわかった。

(10月17日 読売新聞)

●米印、科学技術協定を締結

米、インド両国政府は、科学・技術協力協定を締結した。米政府は従来、核拡散防止条約(NPT)に加盟していないインドとの原子力協力を否定的な立場を取っていたが、ブッシュ大統領は7月、シン首相との会談で原子力協力推進で合意、政策を転換した。

(10月18日 時事通信)

●米、「使える核」の予算断念

ブッシュ米政権が「ならず者国家」やテロ組織の地下司令部や大量破壊兵器の壊滅を狙って開発を模索している「使える核兵器」の代表格「強力地中貫通型核」について、2006会計年度の予算計上を断念する方針を決めたことが分かった。

(10月27日 共同通信)

●ポリネシアで放射能汚染か

ニュージーランド紙ドミニオン・ポストは、1990年代半ばまでフランスが核実験を行っていた南太平洋のムルロア環礁(フランス領ポリネシア)近くの島で、高レベルの放射能汚染が報告され、住民が相次いで治療などを受けていると伝えた。

(10月30日 共同通信)

●イラン、安保理付託なら濃縮開始

イラン国会は、同国の核問題が国連安全保障理事会に付託された場合、査察強化を目的としたIAEA追加議定書の暫定適用の中止やウラン濃縮の開始などを政府に義務付ける法案を可決した。

(11月21日 共同通信)



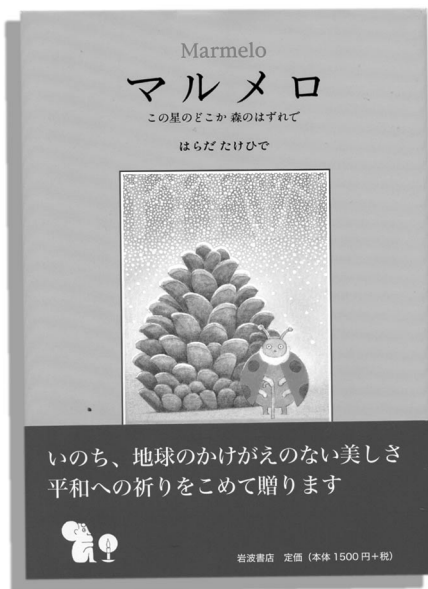
こんにちは！

事務局広場

ПЛОЩАДЬ



Здравствуйте!



いのち、地球のかけがえのない美しさ
平和への祈りをこめて贈ります

「マルメロ」
著者：はらだ たけひで
発行：岩波書店
定価：1500円 + 税



パシュラル先生の
四季シリーズ
「パシュラル先生の春」
「パシュラル先生の夏」
「パシュラル先生の秋」
「パシュラル先生の冬」
著者：はらだ たけひで
発行：エム・ピー・シー
定価：(各) 1000円 + 税

クリスマス
透き通って暖かい一冊

パシュラル先生はとことこ歩く
春、夏、秋、冬の林を
木々や花々にかこまれて、
雲の上に飛び上がったたり
星、お月様の光の中で
静かに耳をすましている
パシュラル先生が眠るのは
落ち葉の長靴
土に還るささやきが聞こえますか
土の中の干し草のベッド
雪の降り積む音が聞こえますか
パシュラル先生はいたずら
木の幹をくすぐっている
緑の葉っぱがクスクスと笑つてる
星の大海へ船出する
朝陽と共に新しい風が吹いてきた

パシュラル先生はページごとに私たちを不思議な
世界に連れて行く。やわらかなパステルカラーの
本を手持ただけで、ほっとやわらぐ。やさし
い、やさしい微妙な色合いが綴られていく。

パシュラル先生の作者、原田健秀さんは岩波
ホールで働いている。9月17日からイラク映画『亀
も空を飛ぶ』が3ヶ月間公開された。バフマン・
ゴバディ監督によるクルド難民の物語だ。トルコ
国境で難民として暮らす子ども達。アメリカの攻
撃が明日始まるかもしれない中で、地雷を売っ
ては現金を得ている。情報を得るための衛星TV
のアンテナ設置と子ども達の仕事の元締め役のサ
テライト君は盲目の赤ちゃんを抱く少女に恋をし
た。時に大画面によぎる少女の絶望。亀と赤ちゃ
んが泳ぐメタファー。ぜひ、皆さんに見ていた
きたい作品だ。

原田さんは、鎌田先生のエッセイにイラストを
描いていらつしやることから、このイラク映画上
映にあたって、JIMNETイラク支援のため
の呼びかけを企画してくださった。鎌田先生の筆
文字呼びかけ文、ラナちゃん募金の紹介、イラク
の子ども達の写真の前に置かれた募金箱には、映
画を見終わったたくさんの方たちのカンパが集
まった。

それは それは たくさんの あたたかさ
たいせつに てのひらに のせて
イラクの子どもたちに とどけます

「戦後」とは何だったのか

季刊『前夜』編集委員会



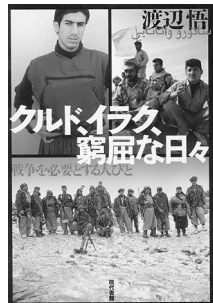
前夜ブックレット①
「戦後」とは何だったのか
著者：高史明、中西新太郎、清末愛砂、
菊池恵介、高橋哲哉
編：季刊『前夜』編集委員会
発行・発売：NPO 前夜
http://www.zenya.org/
定価：500 円

「戦後」六十年、いま憲法「改正」問題が山場を迎えようとしている。本ブックレットは、季刊『前夜』を発行しているNPO「前夜」が主催した『戦後』とは何だったのかをテーマにした対話集の記録集である。現実の出発点である「戦後」を問わないお

Book

クルド、イラク、窮屈な日々

渡辺 悟



クルド、イラク、窮屈な日々
著者：渡辺 悟
発行：現代書館
定価：2310 円（税込）

過酷な現実に向き合っているイラクで、なぜ今なお戦争を必要とする人がいるのか？自爆テロ未遂犯・兵士・学生・家族等と向き合い語り合う中から、イラクの現在を描く。フォトジャーナリストである著者が目撃した真実を豊富な写真とともに書き下ろす。テレビでは語られないこの国の今と未来を考える。

Book

チェチェンの呪縛

横村 出



チェチェンの呪縛
著者：横村 出
発行：岩波書店
定価：2310 円（税込）

十数万人といわれる難民、数知れぬ行方不明者、廃墟となった首都：そして劇場、地下鉄、学校を舞台にしたテロ。「テロとの戦い」を標榜するプーチン大統領は欧米諸国の黙認の下、多数の一般市民・ロシア兵士の犠牲をかえりみず泥沼の戦争を続ける。その実態と真の目的は何なのか。閉ざされた現地取材し続けた記者による迫真の報告。

Book

核拡散と原発

大庭里美



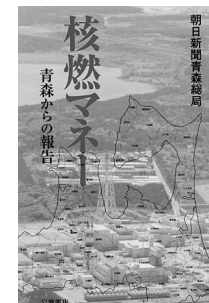
核拡散と原発
—希望の種子を広げるために—
著者：大庭里美
発行：南方新社
定価：1890 円（税込）

本書は、広島市の反核市民団体「ブルトニウム・アクション・ヒロシマ」代表で、今年二月に五十四歳で急逝された大庭里美さんの遺稿集である。核の「平和利用」と核兵器開発・核拡散との不可分の関係と、世界各地の反核運動家が発表した論文の翻訳の二部構成。

Book

核燃マネー

朝日新聞青森総局



核燃マネー 青森からの報告
著者：朝日新聞青森総局
発行：岩波書店
定価：1890 円（税込）

青森県で経済発展の鍵として期待された核燃サイクル事業が動き出して20年。この間、合計1000億円を超える各種交付金等が県内に流れ込み、核燃施設への建設投資は2兆円を超える。地元自治体の財政に根を張り、地元の政治や産業にも大きな影響を与えている「核燃マネー」。その実態を明らかにし、問題点と課題を指摘する。

Book

原爆と写真

徳山喜雄



原爆と写真
著者：徳山喜雄
発行：御茶の水書房
定価：2940 円（税込）

原爆や核被害の問題に取り組んだ土門拳や東松照明など15人の写真家を紹介している。原爆投下から現在まで被爆者一人ひとりやがどのよう生きてきたのか、原爆・核の歴史をキノコ雲の下の側、被爆者の側からの視点でたどる。

Book



第 66 号

発行日 2005 年 12 月 26 日

発行人 鎌田寛

発行所
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原浩

イラスト 武内裕子

重岡 朱

表紙デザイン 酒井隆志

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

協力 風樹 光

オフィスエム

印刷 電算印刷

■編集後記

学生時代に先輩から「二十歳過ぎたら下り坂を転げるように時間が過ぎ去るものよ」と脅されて、予言的中、あっと気がつくと今年もまた終わろうとしている。何だか騙し絵に迷い込んだように、気付くと一年前と同じ場所に戻ってきている気さえする。だがもしかしたら、その「同じ場所」がじりじりと変わっているのを見過ごしているのではないだろうか、下り坂の終わり近く、これからの坂が闇の中で見えない。今年出会った若者達の大きなパワーに夢を繋ぎ、新しい年が元気の出る年になりますように、と祈ります。(布山)

■事務局日誌■

< 10 月 >

- 7 日 イラク支援報告 (東京・岩波ホール)
- 14 日 NPO 学習会 (松本市中央公民館)
- 16 日 チェルノブイリ専門家会議 (東京・カタログハウス)
- 19 日 グランドゼロ第 65 号発送作業
- 22 日 JIM-NET ミーティング (JCF 事務局)
- 25 日 戦後 60 年を問う会・まつもと (松本市中央公民館)
- 27 日 アルプスフロント市民フォーラム理事会 (JCF 事務局)
- 28 日 JIM-NET 運営委員会 (東京・カタログハウス)
- 30 日 朝日村文化講演会 (朝日村中央公民館)

< 11 月 >

- 1 日 グランドゼロ第 66 号編集会議
- 4 日 第 82 次訪問団出発
- 7 日 イラク支援医薬品緊急発送
- 10 日 イラク支援訪問団出発
- 12 日 第 82 次訪問団帰国
- 12 日 東海医療工学専門学校文化祭
- 18 日 グランドゼロ第 66 号編集会議
- 21 日 チェルノブイリ支援会議 (信州大学)
- 22 日 戦後 60 年を問う会・まつもと (松本市中央公民館)
- 24 日 9 条意見広告の会 (松本市勤労会館)
- 25 日 NPO 学習会 (松本市中央公民館)

< 12 月 >

- 7 日 須坂市職労講演会 (須坂市役所)
- 7 日 ゴメリ・エコセンターとの衛星通信 (信州大学)



特定非営利活動法人 日本チェルノブイリ連帯基金 (JCF)

●本部 〒390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229
E-mail jcf@jca.apc.org
Website http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京 〒164-0003
東京都中野区東中野 4-4-1 ポレポレタイムス社気付
TEL03-3227-1405 FAX03-3227-1406
●京都 〒607-8405
京都府京都市山科区御陵田山町 13-3
TEL075-591-7772

チェルノブイリ事故から 20 年、
JCF 設立 15 周年記念イベント

■ ボランティアスタッフ募集 ■

来年 4 月に計画しています記念イベントに、皆さんの協力をお願いいたします。1ヶ月の長期に渡って、イベントを行います。皆さんの手伝っていただける日と内容を選んで申し込んでください。各イベントごとに、説明会を行います。

○写真展 4月8日～5月7日 松本市美術館

☆会場係・物販係

○シンポジウム・講演会 4月8日 まつもと市民芸術館

☆受付・会場係・舞台準備

○絵を描こう 4月22日 松本市美術館

☆受付・会場準備

信州大学附属中学校の生徒 6 名が企画運営を始めています。

○東京講演会 4月23日 有楽町朝日ホール

☆受付・会場係

○映画上映会 4月29日 まつもと市民芸術館小ホール

☆受付・会場係・トーク運営係

◆ 申し込み：JCF 松本事務局
電話 0263-46-4218
FAX 0263-46-6229
E-Mail jcf@jca.apc.org

